特集
TICAD VIの機会に
アフリカ開発を考える

ケニアにおける高齢化
―農村に生きる女性たち―

宮地 歌織

●はじめに

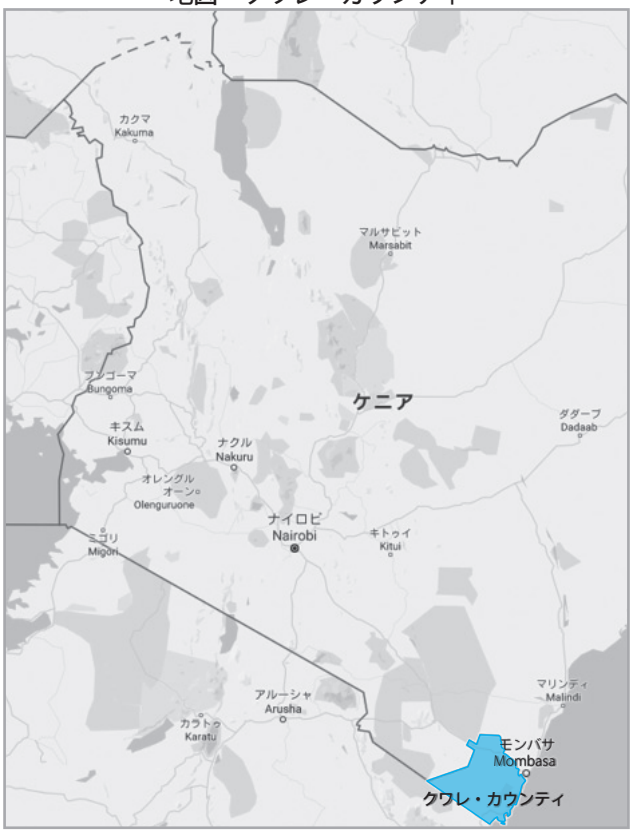
二〇一五年の国勢調査で、日本の総人口に占める高齢者（六五歳以上）の割合は二六・七％に達した。平均寿命、高齢者数、そして高齢化のスピードという三点で、世界各国が未だ経験したことのない「早すぎる高齢化」の道を歩んでいる。

一方、アフリカなど途上国はどうであろうか。高齢化は遠い先のことのようにも思われるかもしれないが、二〇〇二年のマドリッドで開催された「第二回高齢者問題世界会議」において、開発途上国における急激な高齢化が予測され、開発と人口高齢化の問題が優先課題のひとつとして取り上げられた。この世界会議で採択された「高齢化に関するマドリッド国際行動計画」にもとづき、各国の対応が求められている。国際保健の分野では「世界規模の人口の高齢化」（グローバル・エイジング）の問題が提起されるようになり、WHOをはじめとし様々な国際機関も途上国における対策の必要性を訴えている（参考文献①）。

アフリカではグローバル化や都市化にともない、農村の生活も変わりつつある。教育レベルの向上、都市や他国への出稼ぎ、ライフ・スタイルの変化などが、農村での伝統的な家族のあり方、そして高齢者を取り巻く状況にも変化を及ぼしている。「高齢者に対するケアは家族が行うのが当然」という声も聞かれる一方で、実際には、息子や娘は都会で働き、年老いた母親が農村で一人暮らしをしているということも珍しくなくなってきた。南アフリカ共和国では年金制度の歴史があるものの、他のアフリカの国々においては、年金や社会保障制度など高齢者に対する政策が十分に整備されている国は少ない。しかしエチオピアのように今世紀末には現在の日本と同じぐらいの高齢者比率になるともいわれている国もあり（図1）、社会保障の制度が整わない中で、さらに経済成長を試みようとするアフリカにとって、この「早すぎる高齢化」による社会的・経済的影響は大きい。

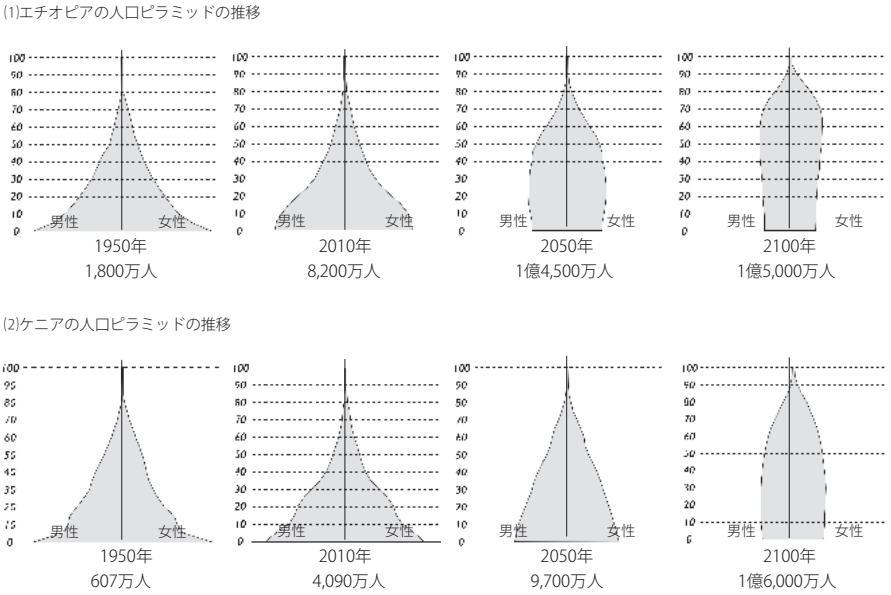
それでは実際のアフリカの高齢者の生活はどのようなものだろうか。「老い」や高齢者の生活を対象とした学問分野は比較的新しく、「老年学」あるいは「老年人類学」の中で通文化的な研究や民族誌的な記述がなされてきた（参考文献②）。民族誌のなかで描かれる高齢者は、知識と経験を備えた存在として尊敬され、儀礼や政治等で

地図　クワレ・カウンティ



重要な役割を担っていたり、また「老いる」ことによって、社会に影響を及ぼすことができるような力（「老いの力」）を獲得し、老いることが身体的・精神的な衰え、あるいは否定的な捉え方だけではないことも論じられてきた（参考文献③）。しかしながら、アフリカの高齢者についての研究はまだ少なく、今後のアフリカの高齢化という現実に向けて、ローカルなコンテクストを重視した調査の必要性が急務とされている（参考文献④）。また国連人口基金（UNFPA）によれば、女性の平均寿命は男性より長いが、高齢になるほど女性の方が差別を受けたり、保健医療サービスや仕事、財産保有や相続の権利が否定されるなど、貧困に陥る可能性が高いことが指摘されている（参考文献⑤）。アフリカにおける高齢者についての研究の必要性、また高齢化と女性の貧困という視点から、筆者はケニア農村での高齢女性を対象としたフィールド調査を行っている。本稿では、フィールドからみえてくる女性たちの姿を描きつつ、アフリカの高齢化について考えてみたい。

図1　エチオピアとケニアにおける人口ピラミッド変化の予測



（出所）増田研「<老いの力>の未来を左右する少子高齢化」（参考文献③所収）222ページ。

●ケニアにおける女性高齢者

ケニアで「高齢者」とは統計上六〇歳以上の人々を指し、平均寿命は、男性が六一歳、女性が六六歳となっており、日本と比べると約二〇歳の開きがある。しかし農村に行くと元気なお年寄りも多く、筆者が一八年前から知っているおじいさんは今年で一〇三歳になったが、背筋はピンとして、颯爽としており、本当に一〇〇歳を超えているのかと思うほどである。一〇〇歳を超えるおばあさんも村に点在する。ただ年齢についていえば、途上国では正確な年齢を知ることがやや難しい。最近は農村でも身分証明書を持っている人も増えてきたが、それに掲載されている情報が正確かどうかはわからない。たとえば実際には年の離れた姉妹のはずが、身分証明書上は生まれた年が同じになっている、ということもある。しかし高齢者の場合は、自分の子ども、孫、ひ孫などの家族構成や歴史的なイベントをたどると、多少の誤差はあるがだいたいの年齢を知ることができ、そのおじいさんの場合は確かに一〇〇歳を超えていると想定できる。

ここでは二〇一六年三月に行った、ケニア海岸部のクワレ・カウンティ（地図）における女性高齢者二一名に行ったインタビュー調査を紹介する。結婚の際にはもともと夫が年上であり、一夫多妻が多いこの地域では、第二夫人、第三夫人の場合もある。そのため夫はかなり年上で、存命なのは七名のみであった。息子家族が同じ敷地内に住んでおり、嫁や孫たちもいる。息子たち家族と暮らすなかで「おばあさん」の社会的な役割として、孫育ては重要にみえる。孫の両親に代わって様々な面で世話をしているので、「孫育ては大変でしょう」と聞くと、「まさか。

息子や娘家族が近くに住み、病気をしても夫や家族にケアをしてもらえる女性高齢者。しかしこのようなケースばかりではなくなってきた現実がある（筆者撮影）

孫と一緒にいる時が一番幸せだよ」と答えが帰ってくる（写真）。また高齢者といっても、今回の調査では年齢が六〇歳から一〇〇歳以上と開きがあったため、身体の状況は様々である。最初に訪問した一〇〇歳を過ぎたおばあさんは、膝に痛みを抱え、昔ほど体が動かないというが、土間を掃いたり、少しでも家のことをしようと心がけていた。家族に囲まれて生活をする高齢者の姿は、イメージの中のアフリカの家族像ではないかと思う。

●困難を抱える様々な女性たち

農村の状況をみていると、家族に囲まれて生活することは安心して老後を過ごせることでもあり、国の社会保障制度が不十分な状況下で、「理想的」ともいえるのかもしれない。しかしすでに「理想的」ではない状況にいる女性たちもいる。ここで三名の女性のケースをみてみたい。

まずは七〇代の女性で、数年前に転んで腰の骨を折ってしまったケース。病院に行き手術を受けたが、悪化してしまい、自分で立つことさえできなくなり、今では家の中でほとんどの時間をソファに座って過ごす。娘に世話をしてもらいたいが、娘は結婚して遠くに住んでいるので世話をしに来ることができない。同じ敷地内に息子家族がいるものの、食事の用意や排せつなどの生活のサポートは、四〇代の姪が同居して行っている。その姪は、結婚もしておらず、子どももいないという農村では珍しい女性であった。このように拡大家族によってケアされる事例も少なくない。

次に、寝たきりの女性のケース。一〇〇歳を超えているその女性は、家族に聞くと、一七年間もの間ほぼ寝たきり、だという。ケニアには日本のようないわゆる「老人ホーム」のような施設はほとんどなく、この女性の世話は主に同じ敷地内に住む息子の妻（嫁）がやっている。ケアをしているその妻によれば、この一〇〇歳のおばあさんには一一名の子どもがいたが、現在は息子が一名、娘は三名。嫁がいうには「ぼーっとしているようだけど、食欲はあるし、食事にはうるさいのよ。」とのこと。「野菜はいやだとか、もっとやわらかくしてくれ、とか。意識がしっかりしているときもある。」ともいう。嫁は「娘がいるのに、まったく世話もしに来ないし、連絡もよこさない。本当なら娘が世話すべきなのに。」と愚痴をこぼしていた。

次は、未婚のシングルマザーのケース。この地域はイスラム教徒が多く、宗教上、結婚前の妊娠はタブーとされている。その女性は、体調の悪さからなのか、生き方のせいか、まだ七〇代なのにひどく歳を取っているようにみえた。片目が痛いが、お金もないので病院にも行けない、という。一人息子は出稼ぎに行っているがほとんど連絡はなく、送金もない。彼女は弟の持つ家畜小屋の中で一人で暮らしているが、土壁は補修されず、骨組みの木がみえ隠れするほどボロボロであった。かつて妊娠した時、相手は結婚をしてくれず、別のところに行ってしまった。メイドをしていたが、体調を悪くし辞めざるをえなかった。ちゃんとした仕事に就けず、地酒づくりに手を出し、そのことでますます結婚から遠のいた。土地もなく、収入もない。近所に兄弟も親戚もいるが、みな生活に余裕はない。毎日目が痛み、生活は苦しい。苦しくて眠れない時に亡くなった母を想い、「お母さぁん」と心のなかで唱え、それを慰めにしているという。

●誰が高齢者のケアをするのか？

インタビューに答えてくれた高齢の女性たちは、病気になった場合など、ケアが必要になったら実の娘に面倒をみてもらいたい、という。しかし実の娘も出稼ぎや結婚で遠いところにいて、実際に娘が世話をするケースは少ない。遠くに住む娘は、病院の付き添いなど、時間をみつけては母親のサポートをするが、都会で仕事をしている場合は、そうそう簡単に日常のケアはできない。

また同じ敷地内に家はあるものの、息子（とその家族）は村を離れていて、帰ってくるのもせいぜい年に数回ということもある。また同じ敷地内の息子家族、特に嫁

と姑の関係は微妙そうで、自分が病気になっても嫁は面倒をみてくれないとこぼす人もいた。また、実際病気になった際に、自分の家で療養するのではなく、実の妹や娘の家に身を寄せているという人も二名いた。

また、年老いたおばあさんが孫と住んで、孫は祖母に育てられるというケースも少なくない。また逆に、白内障で目がほとんどみえない祖母に代わって、家のことをこなしている小学生の孫もいた。その祖母には出稼ぎ先の息子から教育費と生活費が送られている。また実の娘をエイズで亡くし、その娘の子ども二名を引き取っている高齢の女性もいた。学費は出稼ぎに行っている息子が払ってくれているのだという。

このようにほとんどの場合は高齢の女性のケアは、実の娘、嫁、実の妹、親戚の女性などの女性が担っているケースが多いが、一組だけ、夫が病気の妻の世話をしているという珍しい事例があった。とてもユーモアがあって優しいおじいさんで、「夫が妻の世話をするのは珍しいですね」と聞いたところ、幼少のころ、自分の父が亡くなり母が寡婦になったが再婚をせず、そのため大変なことが色々あったという。そのときから家事などをやるようになり、母を助けた。そして今、結婚して、妻が病気になった際に自分は妻を助けたいと思っている。近所に息子家族がいて、嫁もいるが、病気の妻の世話、妻に代わって家事をするのはもっぱら夫であるという。

ここで紹介をした女性高齢者のケアをめぐる実態は、ごく限られた地域のいくつかの事例にしか過ぎないが、同じ農村にあっても、結婚の状態や経済状況、家族構成や家族との関係など、高齢者のケアのあり方は多様であることがみえてきた。

●これからの高齢化の対策について

ケニアにおける高齢者への対策として現金給付（Old People Cash Transfer Pension Scheme：OPCTPS）が始まっている。今回の農村の調査でも二名の女性が月に二〇〇〇ケニアシリング（約二二〇〇円）の給付を受けていた。しかし一名は申請してももらえていない。また、そもそもこの制度を知らない人もいた。農村で、テレビもラジオもなく新聞も読めないという状況や、あるいは知っていても自分で書類を書けない、申請書を出しに行けない、ということも多いだろう。高齢女性の場合は識字率も低く、自分のサインを書けない人もいる。身分証明書の年齢が実年齢と異なるケースもある。また実際にはその財源の確保、持続性も懸念されている。

これからさらに経済成長を目指すアフリカの国々にとっては、高齢化対策はまだ先の課題と思われがちである。TICAD Ⅵでは高齢化の課題はクローズアップされなかったが、低所得のうちに高齢化がおとずれ、高齢化が貧困問題と重なれば、高齢者の生活の質はどうなるだろうか。二〇一六年一二月に「第二回アフリカ地域・国際老年学会議」（International Association of Gerontology and Geriatrics：IAGG）がナイロビにて開催される。四年前にケープタウンでも開催されたこの会議では、各国政府、アドボカシー団体、NGO、研究者など様々な関係者が集い、アフリカの高齢化について議論を重ねる。世界における高齢化問題は先進国よりも開発途上国で深刻化するともいわれており、「早すぎる高齢化」を経験した日本は、将来を見越した高齢対策に寄与できるという視点もある（参考文献⑥）。今後も研究分野あるいは実践分野におけるアフリカの高齢化についても注目していきたい。

（みやち　かおり／佐賀大学男女共同参画推進室特任助教）

《参考文献》

① WHO, *World Report on Aging and Health*, 2015.
② 青柳まちこ『老いの人類学』世界思想社、二〇〇四年。
③ 田川玄・慶田勝彦・花渕馨也（編）『アフリカの老人――老いの制度と力をめぐる民族誌』九州大学出版会、二〇一六年。
④ Barney Cohen and Jane Menken eds., *Aging in Sub-Saharan Africa: Recommendations for Furthering Research*, The National Academies Press, 2006.
⑤ UNFPA『二一世紀の高齢化――祝福すべき成果と直面する課題』二〇一二年。
⑥ 大泉啓一郎・梶原弘和・新田目夏実『開発途上国の高齢化を見据えて――新しい支援・協力への視座』平成一七年度国際協力機構客員研究員報告書、国際協力総合研修所、二〇〇六年。